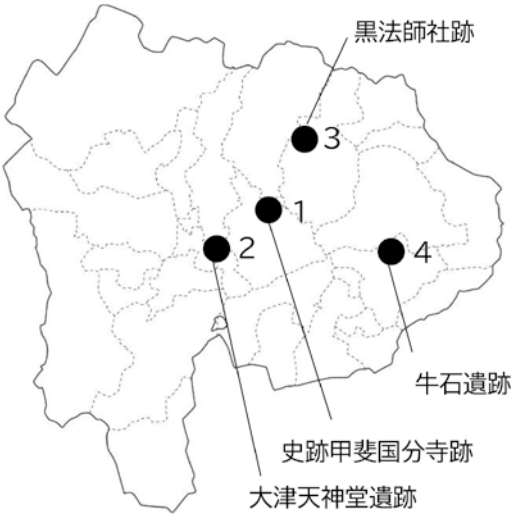
2024（令和6）年度　第1回
遺跡調査発表会要旨



発表遺跡　Line up

発表１　史跡甲斐国分寺跡（笛吹市）
笛吹市教育委員会　江草 俊作

発表２　大津天神堂遺跡（甲府市）
山梨県埋蔵文化財センター　熊谷 晋祐

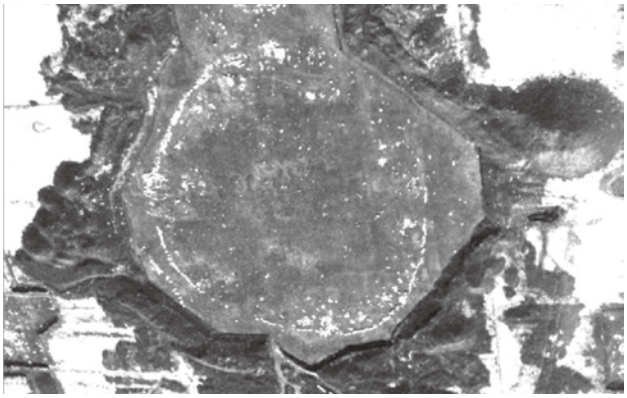
発表３　黒法師社跡（甲州市）
松里史跡調査会　櫛原 功一

発表４　山梨の重要遺跡を振り返る
牛石遺跡（都留市）
都留市郷土研究会　奈良 泰史

1　史跡甲斐国分寺跡　金堂南面敷石

2　大津天神堂遺跡　室町時代の溝と出土遺物

3　黒法師社跡　調査風景


4　牛石遺跡　環状列石

日時　2024（令和6）年 10 月 12 日（土）
会場　帝京大学文化財研究所大ホール

主催　山梨県考古学協会
共催　山梨県埋蔵文化財センター

史跡甲斐国分寺跡

笛吹市教育委員会　　江草　俊作

1　所　在　地　　笛吹市一宮町国分地内
2　調 査 主 体　　笛吹市教育委員会
3　調 査 期 間　　令和３年度～令和５年度
4　調 査 面 積　　約 180㎡
5　調 査 原 因　　史跡内容確認調査
6　調査担当者　　江草俊作
7　調査の概要

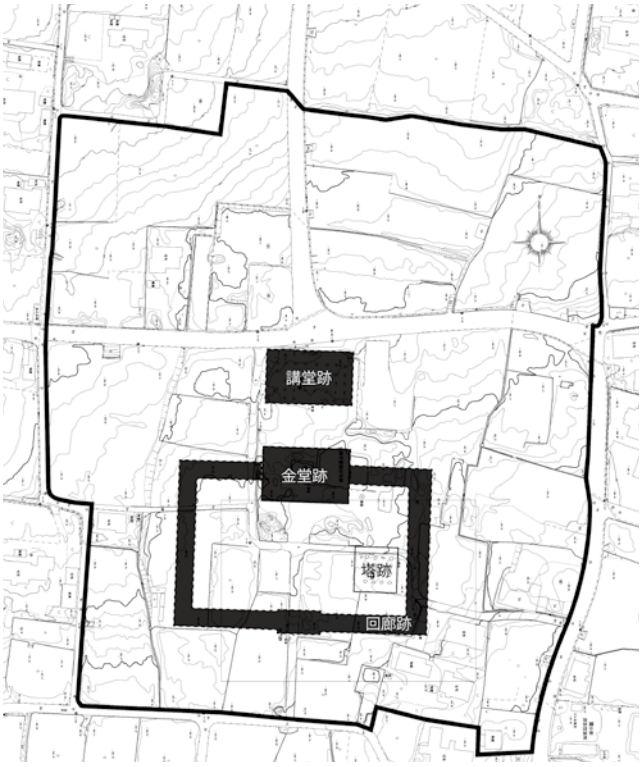
（1）史跡甲斐国分寺跡について

甲斐国分寺跡は、甲斐国に設置された国分寺を示す史跡です。天平 13（741）年、聖武天皇が命じた「国分寺建立の詔」によって、全国で一斉に国分寺・国分尼寺の造営が始まりました。甲斐国では、笛吹市一宮町国分地域が造営地として選定され、御坂山地から笛吹川に向かって流れる金川により形成された広大な金川扇状地扇央部に、国分寺と国分尼寺が南北に並ぶよう配されました。標高は、金堂基壇中心部で約 363 mであり、北西に向かって緩やかに傾斜した斜面の上に建立されました。

笛吹市内には、国分寺・国分尼寺をはじめとして、国府推定地や東海道に属する官道「甲斐路」といった古代甲斐国の政治・文化に関わりが深い史跡・遺跡が数多く所在することから、笛吹市域は、古代甲斐国において、都と結ばれた政治・文化の中心地であったことが窺えます。

大正 10（1921）年８月、甲斐国分寺の跡として知られ、当時の建物の柱を支えた「礎石」が現地に残されていたことから、内務省の調査が行われました。その結果、遺跡としての重要性が認められ、翌年 10 月 12 日に史蹟名勝天然紀念物保存法に基づく国の「史蹟」に、山梨県内で初めて指定を受け、今日まで保存されてきました。

甲斐国分寺跡では、発掘調査によって、塔や金堂、講堂といった寺院の中心的な建物跡の規模や構造が明らかになってきています。特に、金堂と講堂の南面では、花崗閃緑岩を敷き詰めた石敷が確認され、豊富な石材によって装飾されたという特徴的な遺構が明らかになりました。しかし、約 1,250 年前に造営された甲斐国分寺の往時の姿を検証するには、依然として情報が少なく、一つずつ明らかにしていく必要があります。



甲斐国分寺跡伽藍配置図

（2）調査の成果

今回の調査は、令和６年３月に策定された「保存活用計画」に向け、遺構の保存状態や整備方針を考えるための必要なデータを得るために、令和３年度から５年度にかけて行われました。今回の遺跡調査発表会では、３か年の調査から見えてきた甲斐国分寺の往時の姿について、最新情報とともにご紹介します。

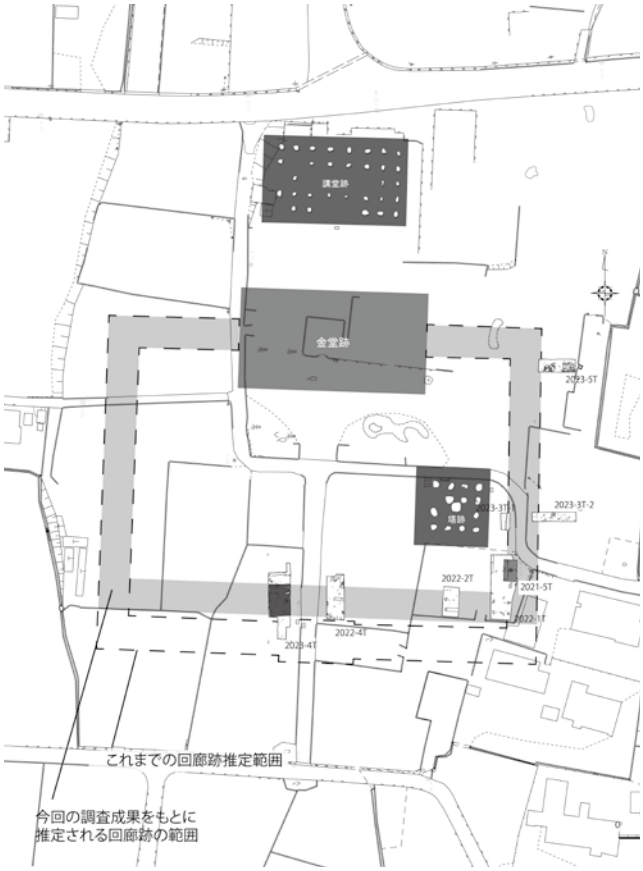
①伽藍の全体規模

これまでの発掘調査では、回廊跡の遺構が明らかに

なっていないため、往時において寺院空間として機能していた範囲の全体規模を推定することができませんでした。

今回の調査において、回廊跡の遺構確認を主な目的として発掘区を設定したところ、回廊跡南東隅の礎石列や南回廊の礎石が確認されました。今回確認された礎石列をもとに、往時の姿を復元すると、南北が約67.5 m、東西が約100 mもの大きさの回廊があったと推定されます。

また、回廊跡から講堂跡まで含めると、南北約112.5 m、東西約100 m（およそ野球場一面分）の広大な敷地の中に寺院が造営され、機能していたことが明らかになりました。



回廊跡復元図

②回廊跡の構造

今回の調査では、回廊跡の礎石が合計８点確認され、南東隅の礎石配置が明瞭に確認されたことから、建物の桁行と梁間を復元できるようになりました。そのことから、国分寺で修行を行った僧侶が廊下として使用したと考えられる幅が約2.4 mで、廊下から外に約1.8 mの軒先が突き出すと想定されます。

回廊全体における礎石位置の推定ができるようになったことは大きな成果といえます。しかし、回廊跡南東隅の礎石位置を基準として、調査を進めたものの、関連する遺構は確認されませんでした。史跡は長い年月の中で、周囲の影響を少しずつ受けながらその場にあり続けましたが、現代まで残されているというのは、奇跡的な確率であるといえるかもしれません。

（３）まとめと課題

今回の調査では、伽藍の全体規模を把握することができた一方で、金堂跡石敷と中門跡の明瞭な遺構が確認されませんでした。

今後も史跡整備に向け、遺構の保存状態や性格を把握することを目的に、既往調査と対応させながら一つずつ課題を解決していく必要があります。

中門跡調査状況

金堂南面石敷調査状況

大津天神堂遺跡

山梨県埋蔵文化財センター　熊谷　晋祐

1　所　在　地　甲府市大津町地内
2　調 査 主 体　山梨県埋蔵文化財センター
3　調 査 期 間　令和５年６月５日～令和６年７月５日
4　調 査 面 積　4,410㎡
5　調 査 原 因　中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事
6　調査担当者　熊谷晋祐・鷹野あきこ　等
7　調査の概要

（１）遺跡の立地・環境

遺跡が位置するのは甲府市大津町の水田地帯で、リニア中央新幹線の新駅建設予定地点となります。かつて釜無川がつくりだした扇状地の扇端部にあたり、盆地のなかでも標高が低い地帯となっています。昭和時代に広くほ場整備されたこともあり、遺跡の分布は不明な地域でしたが、本事業等に伴う試掘調査において、いくつかの遺跡が新たに見つかっております。それだけでもう、「大発見」なのです。

（２）調査内容

発掘調査は１年間の長丁場となりました。現在の地面から約 50cm 下層に中世末頃の水田跡を中心とした生活面が、同じく 70cm 下層に室町時代（15 世紀頃）の掘立柱建物跡や溝などを中心とした生活面が確認されました。地下水位が保たれていたためか、杭・木柱・木製品が保存状態よく出土しています。

（３）中世末頃の生活面

この生活面からは、畦等によって区画された水田跡が 14 枚以上見つかりました。“等”としたのは、畦以外の遺構もあったためです。それは、壇状に造成された平面長方形の盛土遺構です。幅３ｍほどで直線的に伸びる、道状のものもありました。いずれも上面が後世に削平されており、盛土遺構の上面に何があったかは不明ですが、現在でもまれにみられる「島畠」と呼ばれる畑だった可能性があります。島畠となれば、山梨県内では初めての調査事例です。水田は砂層でパックされており、当時の足跡などが明瞭に確認されました。

また、畦で区画された水田の地割りは、明治年間に作成された地籍図と整合する箇所があり、調査区西側では、地籍図と同じ場所で流路も確認されました。

（４）室町時代（15 世紀頃）の生活面

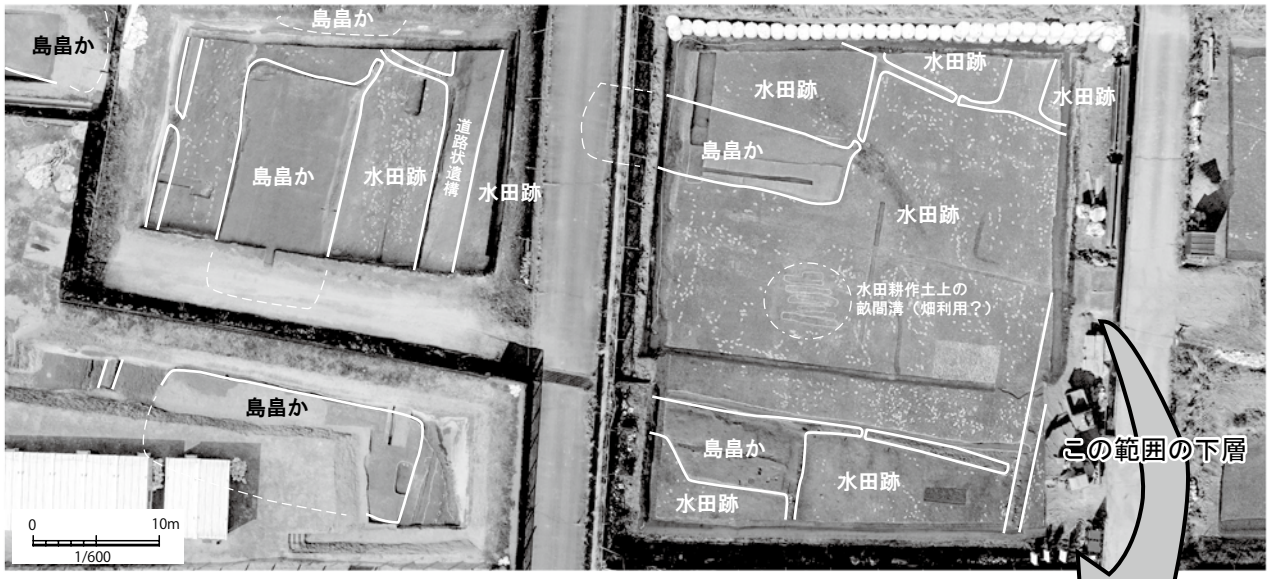
この生活面からは、溝 40 条程度、掘立柱建物跡 10 棟以上、素掘りの井戸跡６基、杭列、集石等の遺構が見つかりました。いずれも、集落が形成されていたことを示すものです。溝は、北から南へ向かうものが大半であり、それらは東へ９～ 12 度程度傾斜していました。溝のうち１条は、一度調査区の外側に出てしまいますが、ロの字に回る区画溝となる可能性があります。また、調査区東端に見つかった溝を境に遺構の分布がなくなるため、ここで集落の東端をとらえているかもしれません。溝の中からはかわらけやすり鉢などの土器が出土しているほか、漆椀や杓、横槌（よこづち）といった木製品や、鎹（かすがい）で繋がれたままの板材も出土しました。

掘立柱建物跡は、重複する場合が多く、複数回に建て替えを行っていると思われます。２間×３間程度のものから、４間×６間の大型のものも認められます。柱根が残存しているものも多くありました。

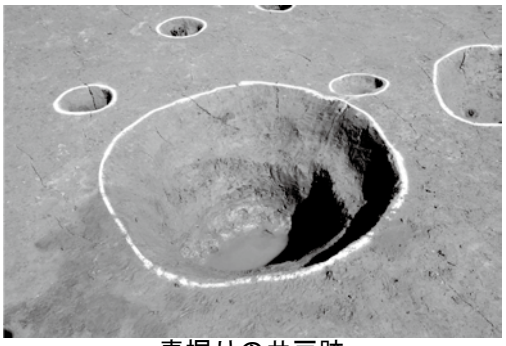
井戸跡はいずれも素掘りのもので、１基を除いて溝に接して設けられていました。水位調整のために、自噴した水を溝にオーバーフローさせる役割があったのではないかと考えています。ちなみに、遺跡から１km 西に位置する同じ時代の二又第１遺跡では、石組の井戸が造られています。両遺跡でみられる井戸の違いが、地質的なものなのか、井戸所有者の階層的なものなのか、検討の余地があります。

（５）まとめと課題

これらの見つかった遺構や遺物から、大津天神堂遺跡は、ムラのなかでも有力者の屋敷地にあたる範囲を発掘したものと考えられ、当時の空間利用を考える上でまたとない調査成果となりました。ところで、調査区の西側は、「大津町字大津」の範囲であり、遺跡が形成されていた頃に津＝船着場としての役割をもっていたかどうか、文献史の検討も含めて今後の課題です。

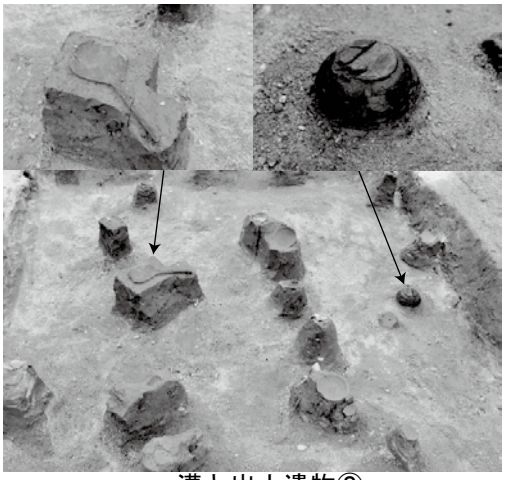


大津天神堂遺跡第１面目（中世末）　水田跡・島畠状遺構



素掘りの井戸跡

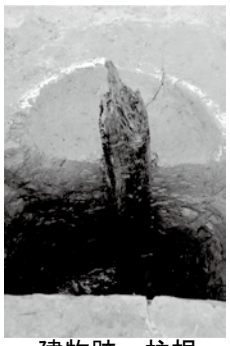
溝と出土遺物①



溝と出土遺物②

第２面　室町時代の集落跡

掘立柱建物跡群



建物跡　柱根

黒法師社跡

松里史跡調査会　　櫛原　功一（帝京大学文化財研究所）

1　所　在　地　甲州市塩山小屋敷地内
2　調 査 主 体　松里史跡調査会
3　調 査 期 間　令和５年 10 月 14 日～令和６年３月 20 日
4　調 査 面 積　約 200㎡
5　調 査 原 因　学術調査
6　調査担当者　櫛原功一・土屋治彦
7　調査の概要

（１）黒法師大天狗に関する伝承

黒法師社跡は甲州市塩山藤木の扇山（恵林寺山）の西麓、標高 650 mに位置します。社跡のすぐ北側には県営柚ノ木発電所の送水管が設置されていて、かつて発電所の貯水池付近に「権現木」という小字があり、松の大木が数本あったあたりが参道の入口といわれています。近年では社の所在を知る地元の人もほとんどなく、忘れ去られた状況でした。

この社を巡って、地元では次のような伝説が知られています。天正 10（1582）年、武田家滅亡ののち、４月３日に織田勢が恵林寺に攻め入り、寺内に匿われていた佐々木次郎らを差し出すように要求しましたが、住職の快川国師は拒否し、国師をはじめとする禅僧ら 150 余名が山門に集められ、火定しました。のちの中興の祖、末宗禅師ら何名かは逃げのびますが、このとき、ひとりの僧侶が黒煙となって舞い上がり恵林寺山の頂上に降りました。この僧侶が「黒法師大天狗」で、のちに人々から「黒法師智羅坊大権現」として祀られたといわれます（『松里の昔ばなし』）。

この黒法師天狗の祭礼は、かつて山頂で玉宮地区と松里地区合同で行われていたのが、やがて山頂から八丁（約 800 m）下ったところに祠を設け、それぞれ黒法師を祀るようになったといわれています。

（２）黒法師社と山岳信仰

この恵林寺山では、恵林寺山城跡が内藤和久氏によって確認されています。また永禄６（1563）年の「恵林寺検地帳」には、すでに「黒法師山」とあり、恵林寺焼討以前に恵林寺支配の山として「黒法師山」が確認できます。したがって黒法師社の創建は永禄６年以前と推測できます。また関連資料として、地元には幕末～明治初の恵林寺住職、円応契梁禅師による「黒法師大明霊」の掛け軸、加藤会元住職による「黒法師智羅坊大明霊神」と記したのぼり旗（昭和 37（1904）年）が存在しています。また明治 27（1894）年の「恵林寺全図」には、恵林寺山中腹に「黒法師社」、恵林寺山頂には「大天狗社」が描かれています。

黒法師社では昭和 40 年代まで祭礼が行われていましたが、やがて山での祭は廃止となり、本殿は恵林寺境内に移され、拝殿は昭和末頃に倒壊し、放置されたようです。

近年、山梨市下井尻の依田家文書のなかで黒法師祭に関する明治元（1868）年の古文書が確認されました。それによれば「恵林寺領山内黒法師祭礼の義は往古に復し年々二月二十一日に行いこの度再建した御輿を、栄昌院を先頭に松尾神社に納め神主にて祈祷し村々行幸を済まして黒法師へ帰興すること」と定め、これを松尾神社、恵林寺、松尾神社の氏子総代（小屋敷村、三日市場村、藤木村）が石和代官所に提出しています。

黒法師祭との関連がうかがえる行事として、藤木地区では２月 28 日に「鎮火祭」があります。以前は大きなやぐら（天狗棚）を組み立て、お供えをし、恵林寺山に向かって湯立神楽が執り行われました。この行事は地区の防火を願う火伏の祭りとされていますが、江戸時代に松尾神社で９年に１度行われていたという「大つくゑ神事」との関連が推測されています。

また恵林寺山の東側にある玉宮地区には「くろぼっさんのお祭り」があり、毎年１月 21 日に中腹の黒法師天狗社から黒法師を金剛院に勧請し、放光寺住職らによる護摩供養、湯立神楽が行われています。

（３）黒法師社跡の調査

松里史跡調査会（代表土屋治彦）では、令和５（2023）年に現地を踏査し、山中に倒壊した社殿の瓦や建築材が散乱し、朽ちるままに放置された状況を確認しました。また巨岩が社跡の背後に屹立する景観を確認し、この社が磐座信仰に起源をもつのではないかと推定しました。この調査会では、毎月１度、松尾神社や黒法師社に関する古文書等を読み、９月には地区民に呼び掛けて「黒法師について語る会」を開催しました。ま

た「甲州市民提案型協働まちづくり事業」の補助金を得るとともに、帝京大学文化財研究所の協力を得て10月から翌年３月の土日を中心にボランティアによる瓦、建築材の片付け、発掘調査を行いました。

その結果、石垣や石段を伴う３段のテラスが確認され、２段目のテラスには3.6 × 2.7 mの拝殿と思われる礎石群、３段目のテラスには1.6 × 1 mの本殿跡と思われれる石組が発見されました。1段目と２段目、２段目と３段目のテラスをつなぐ石段があります。また２段目と３段目の間には石段左側に破損した御神灯があり、その裏面に慶応３（1867）年、下柚木村の五名の寄贈者名が刻まれていました。倒壊した建築材や瓦類から、拝殿建立は明治時代と推測され、屋根は桟瓦葺きで、軒瓦や棟瓦には武田家の家紋の花菱があります。この遺跡で最も注目すべきなのが本殿の背後にそびえる高さ４mほどの磐座で、ひとつの自然石ですが、風化によって割れ目が入っていて、まるで二つの石を人工的に重ねたようにみえます。

出土遺物は少なく、テラス面から宋銭「至道元寶」（995年初鋳）１枚が発見され、この社が中世以前から存在していた可能性を示しています。そのほか「寛永通宝」３枚、長さ12㎝ほどの鉄管などが発見されています。

調査前

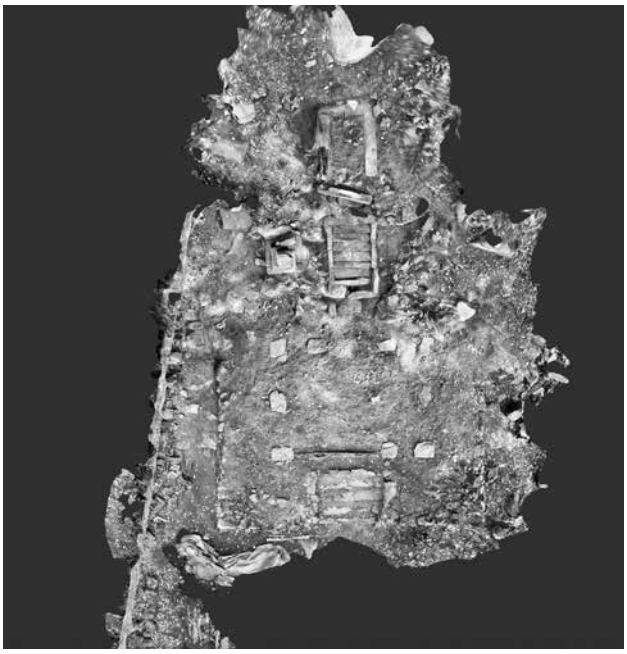
拝殿礎石

（4）まとめ

磐座

黒法師社跡は恵林寺山の山岳信仰および磐座祭祀に起源をもつとみられますが、江戸時代には３段のテラスとして整備され、明治時代には拝殿が建立されました。恵林寺、松尾神社、藤木の鎮火祭との関連性がうかがえるほか、県内各地で１月、２月末に行われている天狗祭との関係がありそうです。さらに茸形の磐座は笛吹川をはさんだ山梨市牧丘町内の笠石大明神に類例があり、室町末の本殿が残っています。また、牧丘町内でも「黒法師祭」が行われ、黒法師社跡を考えるうえで参考になります。

調査会では地元の松里中学校での講演会、現地見学会を開催し、パンフレットを印刷し、地区の各戸に配布したほか、現地に説明版を設置しました。このように地元主体の遺跡調査に文化財関係者が加わり助言していくような今回の調査のパターンは、今後の遺跡の保存活用のひとつの方向性を示しています。



調査区全景

山梨の重要遺跡を振り返る

牛石遺跡（うしいしいせき）

都留市郷土研究会　奈良　泰史

（1）遺跡の立地・環境

牛石遺跡は、山梨県都留市厚原に所在し、富士山の湧水を源として流れる桂川と、その支流である大幡川が合流する地点に形成された13haにおよぶ河岸段丘上に立地します。遺跡からは、南西方向に近傍の山々の上にそびえる富士山の山頂部付近が眺望でき、また、周囲は山々に囲まれていますが、日が昇る東側は開かれた空間となっています。

遺跡遠景

（2）調査概要

牛石遺跡は、古くから縄文時代の遺跡として知られてきましたが、遺跡の存在が注目されたのは、厚原地区圃場整備事業に伴い実施された３次にわたる発掘調査でした。

①第１次調査　昭和54（1979）年５月～８月

東側エリアを対象に実施し、奈良・平安時代の住居跡23軒及び掘立柱建物跡を検出。

②第２次調査　昭和55（1980）年７月～９月

西側エリアを対象に実施し、縄文時代中期末葉の曽利Ⅴ式土器や加曽利Ｅ４式土器を伴う配石遺構を４地区（第１～４配石区）で検出。

③第３次調査　昭和56（1981）年１月～３月

第３配石区で直径約50ｍにおよぶ環状列石、また、環状列石の内側から弥生時代中期の住居跡３軒を検出。

牛石遺跡では、環状列石を中心とする配石遺構の他、縄文時代中期後葉曽利Ⅳ式期の住居跡１軒、曽利Ⅴ式期の住居跡２軒が検出され、居住域と環状列石・配石群などの関係が注目されます。

配石遺構全景

（3）牛石遺跡の環状列石

牛石遺跡の環状列石は、直径50ｍに及ぶ環状列石（第３配石区）を中心に、東側（第１配石区）、北側（第２配石区）、西側（第４配石区）の各区で発見され、これらは出土土器より縄文時代中期末葉の所産であることが判明しています。

①第１配石区

20～30㎝大の河原石による組石５基を中心に、河原石が柄鏡状に配置され、柄鏡状の柄の部分に石棒の破片を用いた石壇状の施設、また、張出しの基部には、胴下半欠損の加曽利Ｅ４式土器が埋設されていました。配石には、打ち欠かれた河原石の他、溶岩も認められ、これらに混じって有頭石棒１点、磨製石斧８点が出土しました。

第１号配石区

②第２配石区

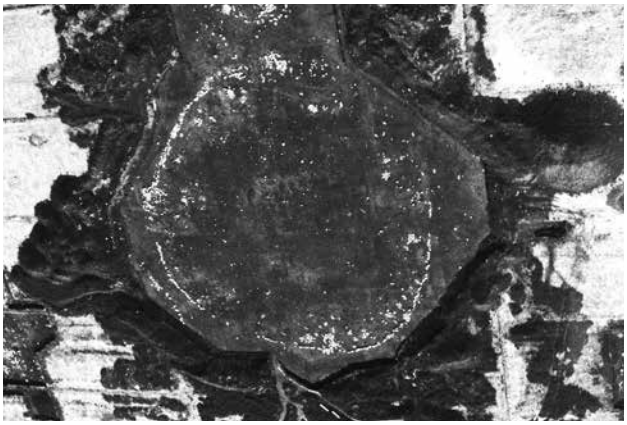
４～５ｍの規模を有する半月状の配石遺構（第１配石遺構・第２号配石遺構）が２基検出され、また、曽利Ｖ式土器の屋外埋甕が３基検出されました。

第２号配石区

③第３配石区

直径 50m におよぶ環状列石は、３つの形態の異なる配石から構成され、まず、ほぼ東西南北の方向に対応する直径４～５ｍの規模を持つ小サークル状の配石、次に、小サークルを連結する列石、最後に、この環状に巡る列石の内側に配された１ｍ前後の規模を持つ組石です。

列石や組石の内側空間には、河原石や礫が若干散在しているのみで、特別な施設や出土遺物は認められませんでした。



第３号配石区

④第４配石区

高さ 80cm の立石を中心に、20 数基の組石が認められ、組石は１ｍ前後の長方形状のものが最も多く、組石として用いられている石には石棒の破片・石皿・磨石・溶岩などが認められ、これらの周囲には、20～60cm 大の河原石が散在し、積石状に河原石が折り重なった箇所が認められました。また、曽利式のＸ字状の把手が付けられた大型の甕形土器が配石下から出土しました。

第４号配石区

（４）今後の課題

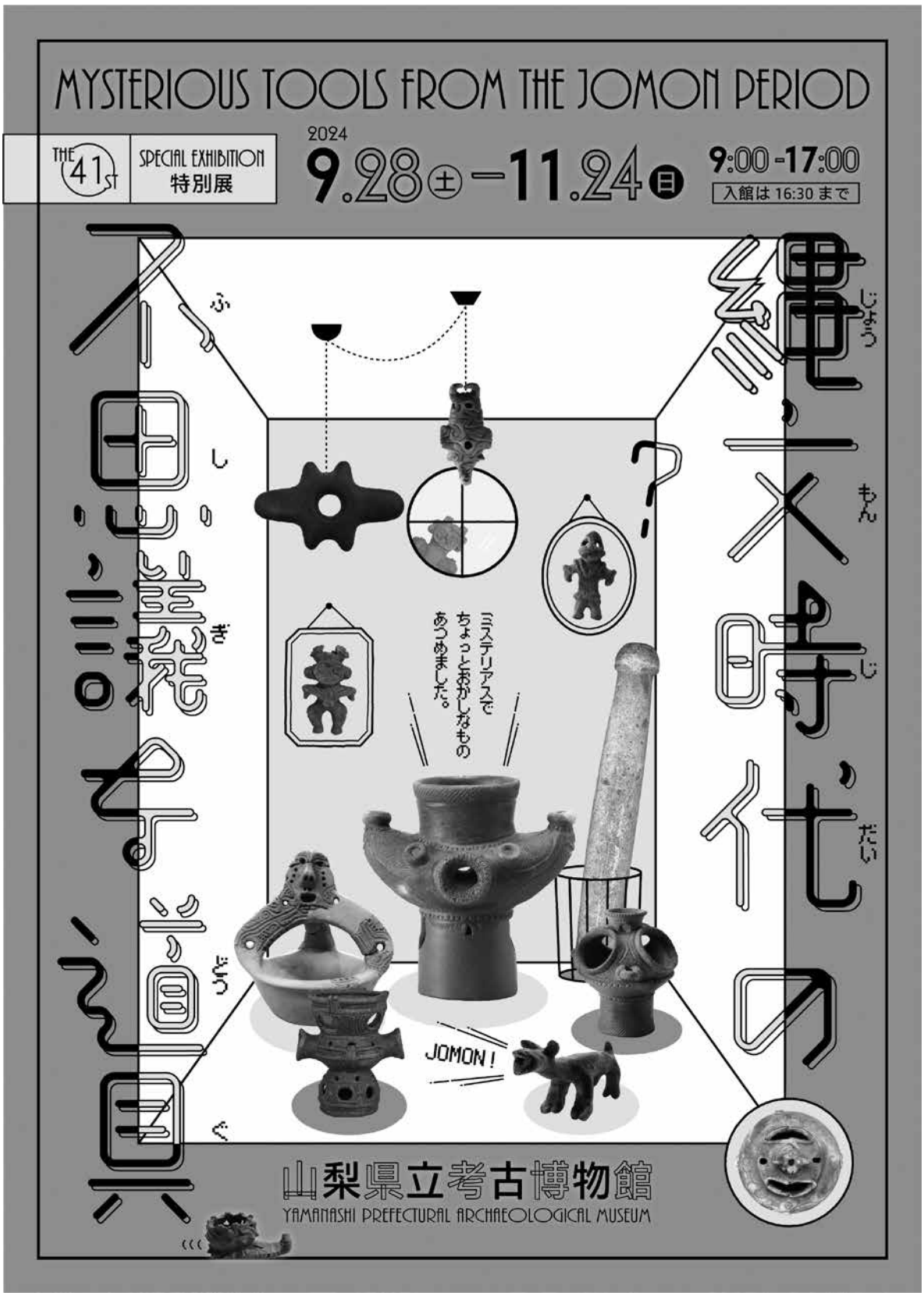
牛石遺跡の環状列石では、縄文時代中期後葉の曽利Ⅲ・Ⅳ式期以降、特に中期末の曽利Ｖ式及び加曽利Ｅ４式土器などがまとまって出土し、後期の遺物は認められないため、中期末で終焉を迎えた環状列石ということになります。

近年、環状列石の研究は、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する伊勢堂岱（いせどうたい）遺跡・小牧野遺跡・大湯環状列石などを中心に、環状列石に留まらず、それを取り巻く、建物遺構や墓域の存在などが明らかにされ、集落・共同祭祀場・墓地の展開プロセスを通じた縄文社会の解明に向けた取り組みが進展しています。

これらの環状列石は、すべて縄文時代後期以降のものであり、その前段階となる牛石遺跡の環状列石との関連性は、興味深いテーマです。

しかしながら、これまでの牛石遺跡の発掘調査では、環状列石の形状は明らかになりましたが、環状列石を取り巻く、遺構群の全体像は明らかになったとはいえない状況です。

そのため、①環状列石と第１・２・４配石区（未発見の配石遺構）などが、同心円的に配置されているのか否か、②居住域の存在と広がり、③墓地の存在と形態などについて、後期以降の環状列石との繋がりや関連性を踏まえて、実態解明に努めなければならないと考えます。



2024（令和6）年度　第1回

遺跡調査発表会要旨

発行日　2024 年 10 月 12 日（土）
発行所　山梨県埋蔵文化財センター　TEL 055-266-3016
〒 400-1508 山梨県甲府市下曽根町 923
https://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/
山梨県考古学協会　TEL 055-263-6441
〒 406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566
帝京大学文化財研究所内
やまなしのこうこがく https://sankoukyou1979.wordpress.com/
印刷所　峡南堂印刷所　TEL 055-235-2528